

マジナル クロス・ボーダー 辺境から越境へ

——鷺沢萌の語り——

康 潤伊

一、はじめに

朝鮮半島にルーツを持つ日本定住者を名指す語は、在日朝鮮人、在日コリアン、コリアン・ジャパニーズなど、数多くつくられてきた。どの語を自称として用いるかは、名前の読み方や日本式通名の使用、そして国籍の選択などの如何と同じく、各人のルーツへの思いや、朝鮮半島および南北国家との心理的／政治的距離などによって様々である¹⁾。

こうしたエスニック・アイデンティティを規定するうえでの様々な事項は、そのまま在日朝鮮人文学研究における世代区分の基準にもなってきた。殊に民族や国家への強い帰属意識は、金達寿や李恢成ら一、二世の作家たちに顕著な特徴であり、その基準のひとつとなっている。この帰属意識は李良枝や柳美里、金城一紀、そして鷺沢萌らに引き継がれることはなく、彼／彼女らは「(在日)」としてのアイデンティティを、既成の祖国観念や民族理念によってではなく、自我意識や人間的解放の意思によって確立しようする方向²⁾に向かったというのが、定石となっている。

通史的な在日朝鮮人文学研究で必ずと言ってよいほど行われるこういった世代区分論は、作品の主人公が作者そのものであるという前提に立ち、作家自身の思想やその変遷を作品から読み取っていくという流れで展開される。

しかし、例えば金壘我氏が李良枝について、「一作毎に深まりを見せていく主人公たちの母語での苦闘と、それに伴う心理の変化を作家の体験をもとに考察」するとし、『刻』からまた四年後、韓国に「おろおろ」しながらも「いとしくてたまらない」と言っていたスニ（引用者注）『刻』の主人公は、「由熙」となって祖国を去ることになってしまった³⁾。」と論じるとき、それは作家へのアプローチとなっているのだろうか。

こういった研究は取りも直さず、作者自身の出自や経歴と似通った主人公が設定されていることの多い在日朝鮮人文学の現状を反映しているものであり、まったく無効であるともいえない。

しかし、こうした「主人公＝作家」パラダイム内にある限り、鷺沢萌および彼女の文学について何かしらを述べることに

はできない。なぜなら彼女の在日朝鮮人をめぐる作品群は、

磯貝氏が『ほんとうの夏』を論じる際に指摘しているように、「同世代の男主人公に事よせて自らの〈在日〉とのスタンスを虚構化⁽³⁾」していると言じられているものが多いからである。

ここで着目したいのは、磯貝氏は男子大学生が主人公である『ほんとうの夏』を、鷺沢がはじめて在日を描いた作品として「産衣」と呼び、作者の体験記である『ケナリも花、サクラも花』（一九九四・二、新潮社）を、その「産衣」を破いたものとしてより高く評価している点だ。「作者が異性を描く」自らのスタンスの虚構化⁽⁴⁾という論とあわせて、この評価は先述の「主人公」作家「パラダイムをより浮き彫りにするものに他ならない」。

このパラダイムは、むしろ作家研究を阻害してきたのではないだろうか。鷺沢萌がこれまでほとんど等閑視されてきたのは、そこに起因するように思えてならない。

よって本稿では鷺沢萌の作品を語りとしてとらえ、それらに「様々に付与されるものへの対抗戦略およびそこから「ずらし」——つまり鷺沢を辺境に追いやる言説を読み解き、そこからの越境的行為や言説を見出していく。

なお本稿では扱わないが、こういった言説が見出せる作品のひとつに、『ケナリも花、サクラも花』がある。概要のみ簡単に述べておくと、この作品における鷺沢の語りは、場や対象によってアイデンティティがゆらぎつつも、そのゆらぎ

を許容しない本質主義的な〈力学〉を顕在化させるものとなっている。それと同時に、彼女の語りは、本作品に対する評価が陥りがちな「日本／サクラ／鷺沢—韓国／ケナリ／スヨン」の構図を退けるものであった。

本稿においては彼女が私小説と呼ぶ『私の話』（二〇〇二・一一、河出書房新社）に着目し分析を行う。鷺沢に様々に付与されるものが前景化してくるのは、やはり留学をめぐる言説である。『ケナリも花、サクラも花』は留学直前から直後にわたる語りをおさめたものだったが、そもそも「なぜ留学したのか」という点は、鷺沢が日本に帰ってきたあと、繰り返し問われている。こういった留学への当時の評価をおさえつつ、晩年の鷺沢の行動や時代背景を踏まえながら、考察を行っていく。

二、鷺沢萌の〈故郷〉と留学をめぐる言説

在日朝鮮人としての鷺沢萌の特徴として挙げられるのは、二〇歳を過ぎ出自を知ったという点、朝鮮人の祖母を持つクォーターであるという点、そして、（それにも関わらず、と一般的には解されるであろうが）大韓民国、つまり韓国に留学した点であろう。

鷺沢はそんな自身を表す語として、「ナグネ」という語を用いていた。

本のタイトルにある「ナグネ」ということは、「旅人」を意味する韓国語である。好きなことばだ。思い出深いことばでもある。(中略)何かを「持たぬ」者(土地をあるいは国家をあるいは経済力を。何でもいい)、いや、持っていないという事実に「氣付いてしまった者」、と言ひ換えよう、それらの者が宿命的に負わされる帰属性のなさ、いま自分が立っている場所の不確実さ、といったものは、たしかに人間に負担を与える。しかし、そんな負担を自分なりの方法で受け入れることができたとき、弱点は武器に変わる。

この「ナグネ／旅人」は、鷺沢自身の抱く帰属性のなさや辺境性を表す語であると同時に、エグザイルという語を連想させる。

エグザイルの身になるとは、生まれ故郷から完全に切り離されることではない。むしろ今日の世界では、故郷はそれほど遠くにあるわけではない。かといって、いつでも戻るわけでもなく、この不安定などっちつかずの立場をつねに感じながら生きることを余儀なくされているのが、エグザイルの身なのである。(傍線引用者。以下同じ。)

ここでいう「故郷」は、鷺沢にとって何を指すのだろうか

か。「生まれ故郷」とは、二世以降の在日朝鮮人たちにとって、日本に他ならない。しかし、彼／彼女らの「本来帰るべき」ものとしての心理的な〈故郷〉——朝鮮半島および南北いずれかの国家は、「あらかじめ喪失したもの」として、先代の記憶の継承によつて構築されていくものである。こうして、「生まれ故郷」と〈故郷〉のあいだにズレが生じる。

鷺沢萌は、朝鮮半島という心理的〈故郷〉を持たずに育つた。そうであつたがゆえに、彼女が自身の出自を知つた際の衝撃は大きかつたであろう。彼女は、「日本」〈故郷〉＝生まれ故郷の構図をゆさぶられたのである。

在日朝鮮人の特徴として「生まれ故郷」と心理的〈故郷〉の不一致、および〈故郷〉喪失を挙げるとするならば、鷺沢萌はエグザイル／ナグネであると同時に、日本国籍保持者であれクォーターであれ在日朝鮮人である。しかし、鷺沢の〈故郷〉喪失までのプロセスは、「本来〈故郷〉でもあり「生まれ故郷」でもあるべき朝鮮半島を喪失した」というものではなく、「本来の心理的な〈故郷〉である日本を喪失した」というものだったのである。ここに、幼いころから出自を知つていた在日朝鮮人たちと鷺沢の差違があるといえる。

「いつかは帰る」〈故郷〉が朝鮮半島および南北どちらかの国家であるとするならば、朝鮮語を学ぶことは、帰るための、もしくはそれらへの帰属意識を育むための手段として位置付けられるだろう。

まず、大義名分として私には、一日も早く韓国人にならなくてはならず、自分の身体に染みついている日本的なあらゆるものを清算して、韓国を理解し韓国語を自由に操れるようにならなければならないという、義務がありました。実を言うと、そうやってこそ留学する当初の目的と動機を満たすことができるのです。

鷺沢萌と同じく韓国に留学した李良枝がここで語っている、この切実な希求は、「いつかは帰る」(故郷)に向けられたものであることは明白である。では、鷺沢萌はどうだったのであらうか。

流行作家が突如在日朝鮮人であることを宣言し韓国へ留学するというものであっただけに、注目度は高かったであろう。その際、李良枝を引き合いに出され、第二の李良枝になろうと野心を抱いていると思われたり、李良枝ほどこいわゆる「祖国」を希求していないことに不満を抱かれたりしたということは、鷺沢自身がたびたび語っている。ただし、こういった言説は彼女の留学そのものに対しては肯定的に受け止めており、そのうえでのさらに踏み込んだ評価である。

しかし、たとえば永江朗が鷺沢との対談において「実は、鷺沢さんが韓国へ留学したとき、(中略)それはちよつと反動的なんじゃないかと感じていました。理想的な国家なり民

族なりを想像の上でつくりあげてしまい、そこに戻っていくということであれば。」と語っているように、否定的に見ているものもあった。

彼女の留学をめぐる評価は、このように肯定的／否定的の差違はあるものの、両者は根本において同じである。つまり、留学を民族や国家への回帰のためのアクションとしてとらえているという点において、両者は同質のものなのだ。ゆえに肯定的評価であっても、次に「祖国への希求度」が問われるのである。これは、鷺沢に「日本(人)か、韓国(人)か」といった、帰属する国家の選択を彼女に迫るまなざしに他ならない。

留学動機に対して鷺沢自身はというと、「せっかくそういうの(引用者注―四分の一、朝鮮半島の血が流れていること)がありながら、家族の者の誰もがしゃべれないというのはちよつとあんまりじゃないかなっていう気もした」と語っている。ここで鷺沢の言う「あんまり」とは、いったいどういうことなのだろうか。

以下の引用は、鷺沢が講師を務めていた、一世の朝鮮女性たちのための「識字学級」における、彼女と二世女性との会話である。

「でも、それ(引用者注―鷺沢がクォーターであること)じゃアレだろ。家の中で韓国語なんか全然使わなかつ

たろ？」

「うん、使ってなかったです。」

「なのに韓国に留学したのかい？」

「うん」

「どうしてまた？」

この問いに答えることは、私にとっては難しい。

(中略) そうして、十年近く前に韓国に留学した当時も、それと完全に同じ意味を持つ質問が、いろいろな人からいろいろなことばを使って——正に手を変え品を変え、というような感じで、私に降りかかってきた。どうしてまた？

(中略)

私は少しのあいだ考えこんだ。そうしてから、答えた。

「たぶん……、悔しかったから」

それはおそらく、ずいぶん深いところにある私の本音であつたと思う。そうしてそのときが、「深いところにある本音」が私自身の口からはじめて出てきた瞬間であつたかも知れない。

この「悔しかったから」という動機もまた、「あんまり」と同じく抽象的なものであるが、注目したいのはこれが鷺沢の「本音」である点であり、またそれを語った対象が一世の女性であつた点である。

そもそも「識字学級」に通うのは、祖母への思いからのよ

うだ。鷺沢は『ケナリも花、サクラも花』によって、祖母が隠し通してきた出自を暴露したことになる。その後、鷺沢は姉に「ひとりの人間が生涯をかけて守ってきたものを壊す権利は誰にもない」と言われたうえ、祖母が亡くなる前、鷺沢に残した最期のことばは「おばあちゃんのことは、もうよしとくれね」だったという。これによって大きなショックを受け拭い去れない罪悪感と自己嫌悪を抱いた彼女は、以下のうに語る。

私が「識字学級」に通うのは、たぶん自分に対する「言い訳」だ。

祖母が読み書きをできないことを知りながらも、それにいついて何もしなかったことに対して。あるいはまた、先ほど使った表現でいえば自分の中にある自己嫌悪と罪悪感に対して。

そうしたまろもろのものに「言い訳」をするために「識字学級」に通う、と云うのは、マスターベーションに非常によく似た行為であると思う。

こうした背景をふまえ、ある印象的なシーンを讀むとき、「悔しかったから」と「あんまり」の内実が浮かび上がる。それは、祖母の墓参りに行くシーンである。

「ハルモニ（引用者注——「おばあさん」のこと。祖母を指す際にも年配の女性を指す際にも用いられる）……」

もちろん、祖母に向かって「ハルモニ」と呼びかけるのは、それがはじめてのことだった。

「 할머니, 미안합니다. 용서해주시라는 말은 도저히 할수 없는데요……. 저……. 할머니를 정말 사랑했었요. 그리고요……. 그리고 한번만이라도 할머니와 우리말로 얘기하고 싶었요. 미안합니다, 다시 한번…….」

言いながら、少しだけ泣いた。

引用部の朝鮮語の部分を読すなら、「ハルモニ、ごめんなさい。許してくださいなんて、到底言えませんが……私……ハルモニを、本当に愛していました。そして……そして、一度でもいいから、ハルモニとウリマルで話したかった……。ごめんなさい、もう一度……」となる。「ウリマル」とは、直訳すると「私たちのことば」で、朝鮮語を指している。

以上確認してきた点は、つまり朝鮮語を家族のうちの誰もがしゃべれないのは「あんまり」だということ、「悔しかったから」が留学動機の本音だということ、それをはじめて告げたのが一世のハルモニだったということ、そして祖母と朝鮮語で話さなかったということであった。これらを総合すると、「あんまり」や「悔しかったから」は祖母に向けられた

ものであると言える。

これらは先述した従来の評価とまったく異なっており、個人的かつ閉じられたものである。ここからは、政治的選択を彼女に迫るまなざしへの拒絶が読み取れる。しかしここに留まれば、それは本稿冒頭の磯貝氏の三世たちへの評価——在日としてアイデンティティを個に求めた——の枠を出ない。より多層的に彼女の語りを見つめなおせば、もうひとつの新たな語りの戦略性が浮かび上がってくるのである。

三、語りに作用する構造

あらためて確認しておく、以上引用してきたすべての驚沢の語りは出版されている。出版とは、トリン・T・ミンハの「出版は第一の封印を破ること、「入場お断り」の立場が終わること、個人の領域に閉じこもっていた独り言が終わり、未知の他者（読者）と共有する可能性が始まることを意味する。」という指摘を俟つまでもなく、読者に向かってテクストを、語りを、開くことである。開かれた場において、個の家族史に回収せたいと語ること。これをどのようにとらえればよいのだろうか。

周知のように一九九〇年代といえば、「従軍慰安婦」問題が顕在化した年代である。こうした背景を踏まえれば、彼女の留学のみならず、祖母と話すために朝鮮語を学ぶこと、一世の女性たちに読み書きを教えること、そのすべてが、政治

的な意味合いの付与から逃れられない。つまり彼女の行為は、^{ポリティカル・コレクトネス}「政治的に適正である」という判断を下されてしまうのである。九〇年代から盛んに唱えられるようになった「ポリティカル・コレクトネス」について当時の研究では、「PCとは何か」という問いに対する答えは、論者によっても異なるが共通項としては「社会的少数派に配慮する生活態度」という点¹⁷があげられる。」と述べられている。ここでいうPCに、驚沢の行動は当てはまってしまふ。

このポリティカル・コレクトネスという観点から驚沢の語りを振り返れば、それを退けようとする語りが前景化してくる。前節に注12に続く箇所を引く。

私のそんな答えを聞いたハルモニは少しびっくりした表情になり、そのあとで感慨深げに幾度か頷き、そして言った。

「ねえちゃんは根性のある子だねえ！」

(中略) 褒められたこと自体も嬉しかったけれど、「悔しかったから」というひとりで、ハルモニが私の中にある¹⁸気持ちを判ってくれたことも、とても嬉しかった。

傍線部からわかるように、驚沢は、家族という小さな単位内からは承認を得られることのなかった留学および出自の暴露を、より中／大規模な共同体の構成員であるハルモニか

ら承認されている。以降ではこの関係性により着目し、考察していく。

ミンハは、女性間の歴史的な連帯について、以下のように述べている。

すべての民族と同様に、すべての女は、結ばれた絆を解いていく自分独自のやり方を持つている。(中略)「文明化」した使節がつかう支配言語を学ばないようにしている彼女は、また書かない方法、新しく書き直す方法も、学ばなければならぬ。そしてそれができるのは、たいいていの場合、先祖の母たちともう一度触れ合ったときで、そうしてはじめて、生きた伝統は凝り固まった形式に硬直するのをまぬがれ、命は命を育み続け、《過去》として理解されていたものが《現在》や《未来》にその輪を繋いでいくことができる。¹⁹(傍点ミンハ)

つまり、「先祖の母たち」と触れ合うことによって、個の体験は歴史に連なつてゆき、こういった関係の形成を経てはじめて、「文明化」した使節が使う支配言語——ここでは主に男性が用いる言語を指しているが、それを相対化して別のことで書くことができる」と述べられている。では、驚沢は支配言語でない言語を獲得しえたのであろうか。

「アイゴ（引用者注——ここでは「あらまあ」程度の意）

びっくりした、ねえちゃんはどうして韓国語でできるんだい？」

（中略）

「うん？韓国に留学してたから」

「あれ？ねえちゃん韓国人かい？」

（中略）

「えーっと、私自身は韓国人じゃないの。朝鮮から来たハルモニが、日本人のおじいちゃんと結婚したの。それでアボジ（父）が生まれたの」

「ハルモニは元気なの？」

「うううん、ずいぶん前にトラガシヨンヌンデヨ（亡くなったんです）」

「アボジは？」

「アボジド・トラガシヨツソヨ（父も亡くなりました）」

「アボジはイルボン・サラム（日本人）と結婚したんだろ？」

「うん。オモニ（母）はイルボン・サラムです。オモニはまだ元気だからコッチョンハジマセヨ（心配しないでね）」

鷺沢はここで、日本語と朝鮮語が入り混じったハイブリッドな言語を用いてハルモニとコミュニケーションを行って

る。これはまさに支配言語でない言語であろう。ただしこのような、日本語と朝鮮語の混淆は在日朝鮮人同士のコミュニケーションにおいてはまま見られる現象でもあることは付言しておきたい。しかし、ここで『私の話』以前のエッセイを振り返ってみると、『ケナリも花、サクラも花』においては一部言及されてはいるものの、こうした言語を用いた語りはほとんど行われていないことに気付く。したがって、鷺沢は「先祖の母たち」と触れ合い新たな言語を獲得することによってハルモニたちと関係性を構築していったといえるのである。

また、こうした言語は、ハルモニたちが日常で用いており、もともとコミュニケーションを行いやすい言語であるという点、そしてそうであるがゆえに、鷺沢がここに朝鮮語を学んだ意義を積極的に見出している点も、こうした関係性をより重要なものとして位置付けるだろう。

永江（「前略」）おばあちゃんたちのような言葉や文字から隔てられている人の存在は、どういうふうに見えるものですか。」

鷺沢「うーん、すごいって思いますよね。自分があるのが当然と思っているものなして生きてきた人たちだから、やっぱり根性入ってるなっていうふうに思います。」

（中略）

永江「おばあちゃんたちはハングルなら読めるんですか。」

鷺沢「読めない。」

永江「じゃあまったく文字が読めない状態ですか。」

鷺沢「そうですね。だから話をしていの中で微妙に訛ったりしていても、私は韓国語の知識があるからわかるじゃないですか。そういうので安心感を持ってもらってるんだなっていうのがあるから、やっぱり韓国語やっててよかったと思うし。」

以上のように、これはポリティカル・コレクトネスとしての社会的弱者への配慮などではなく、歴史に依拠し主体的に構築された関係性であるといえる。

しかし留意せねばならないのは、鷺沢はこうした関係性をつくることを「マスターベーションである」と述べている点である。

私が「識字学級」に通うのは、たぶん自分に対する「言い訳」だ。

祖母が読み書きをできないことを知りながらも、それについて何もしなかったことに対して。あるいはまた、先ほど使った表現でいえば自分の中にある自己嫌悪と罪悪感に對して。

そうしたもろもろのものに「言い訳」をするために「識字学級」に通う、と云うのは、マスターベーションに非常によく似た行為であると思う。

またもうひとつ、「識字学級」について述べている部分がある。以下の引用は友人との会話のシーンである。

「でもおまえ、エライじゃん、そういうとこに通ってるなんて」

「全然エラかないよ」

「つまりわたくしの場合はですね、オナニーですから」
彼は少々黙り、少し考え、それからにやりと笑いながら言った。

「オナニーねえ……、そりゃあ喜びもひとしおだろ」

ここで鷺沢は、なぜ的なことばでもって自分の行為を名指しているのだろうか。

これを考察する際、思い起こされるのは、鷺沢が韓国について語っていることである。

全然何とも思っていなかった——あるいはそこはかたない嫌悪感さえ抱いていたはずなのに、何かのはずみで寝てしまったあと、急に心を奪われてしまうような男もいる。

わたしにとって韓国はそんな男に似ている。恋愛感情が生まれる前に肉体関係を持つてしまい、ふと気付くとソイツのことはかり考えている⁽²⁸⁾。

ここで生じている鷺沢と韓国の関係性は、偶発的かつ非主体的なものであるが、これに対して、ハルモニとの関係性は、先に見てきたように積極的かつ主体的なものとなっている。国家との関係が肉体関係でもって象徴されるとするならば、ハルモニとのそれを、性交の対立項ともいえるマスターベーションという語でもって名指すことは、まさに国家に包摂されまいとする語りであるといえる。

以上見てきたように、鷺沢は時代性から付与されてしまう政治性を退けつつ、歴史的な連帯をハルモニたちと形成していた。また、それに対してマスターベーションという語を用いる語りも行っており、それはハルモニたちとの関係性を、国家を越境したものととして位置付けるのである。

四、おわりに

鷺沢の語りはどうしても、彼女の立ち位置の不安定さから、辺境に置かれてしまう。彼女は、そうした様々に科されるまなざしにさらされつつも、それを越境する語りを行っていた。ここで今一度通時的に振り返ってみると、先に引用した『ナグネ・旅の途中』が出された二〇〇〇年当時は「ナグネ」で

あった彼女が、『私の話』においては、民族を構成要素とした女性同士の連帯に行きついていることに気付かされる。

そして、先述のように、ハルモニとの関係性に喜びや積極性を見出している点も看過されてはならない。つまり彼女の語りは、この関係性をまさに個人の快楽および喜びとして引き受けていこうとするものだったのである。こうした越境性は、本稿においては国境に対してのものであったが、そのみならず、国境線によつて個人を規定・排除しようと作用する様々な力学やまなざしをも相対化し、それらを脱構築するオルタナティブを積極的に選択するものでもあるのだ。

このように彼女の語りを詳細かつ多角的に分析すれば、一貫性を持ったスタンスが見出せる。ここで「はじめに」で引用した在日三世たちへの先行研究に翻つてみれば、そこからは「国家を希求する『民族への回帰』」とらえている評価軸が浮かび上がる。こういった軸では、本稿で明らかにしてきたような、国家やポリティカル・コレクトネスへの包摂を退けつつ形成されている連帯の関係性は、見落とされてしまう。

鷺沢萌にとつて、女性間の連帯が強く影響していたことは明白である。それはハルモニたちとの関係性や、この場では紙幅の関係上触れなかったが、同世代の在日の女性との疑似姉妹関係の締結が、その証左となるだろう。こういった連帯は、「架空の国家」というコミュニティの設立―つまり、日本でも大韓民国でも朝鮮民主主義人民共和国でもなく、その

どれにも帰属できない人々のための、第四の選択肢に結実してゆく。これはまさに先に言及した、オルタナティブの創出および選択であろう。

従来の在日朝鮮人文学研究の「主人公」作家」パラダイムおよび帰属する国家の選択といった評価軸から逸脱している鷺沢萌の戦略性に焦点をあわせることは、在日朝鮮人文学研究そのものを批評する可能性を持つといえるだろう。この批評性をさらに明らかにしていくことを発表者の研究課題として示し、本稿の結びにかえる。

注

- (1) 本稿においてもどの呼称を用いるかが問われるであろうが、従来、彼／彼女らの手による文学は「在日朝鮮人文学」と呼称されてきたため、それにならない「在日朝鮮人」「朝鮮語」というタームを用いることとする。
- (2) 磯貝治良『「在日」文学論』二〇〇四・四、新幹社
- (3) 金璵我『在日朝鮮人女性文学論』二〇〇四・八、作品社
- (4) 注2に同じ。
- (5) 詳細は拙稿「ふたつの花に託されるもの—鷺沢萌「ケナリも花、サクラも花」教材と作品の齟齬—」(『近代文学 研究と資料』「第二次」第七集)二〇一三・三)を参照。
- (6) 鷺沢萌『ナグネ・旅の途中—場所とモノと人のエッセイ集』二〇〇〇・一一、角川書店
- (7) 浜邦彦「『エグザイル』と『ディアスポラ』—「西インド諸島」出身の黒人知識人たち」(姜尚中編『ポストコロニアリズ

ム』二〇〇一・一一、作品社)

- (8) 李良枝「私にとつての母国と日本」(『李良枝全集』一九九三・五、講談社)

- (9) 鷺沢萌「ケナリも花、サクラも花」(一九九四・二、新潮社 第二章、小山鉄郎「鷺沢萌さんと韓国」『文学界』(第七一卷第九号、一九九三・九)参照。

- (10) 鷺沢萌・永江朗「私小説嫌いの作家が初めて書いた私小説」(『文藝』第四二巻第一号、二〇〇三・二)

- (11) 注10に同じ。

- (12) 鷺沢萌「私の話2002」(『私の話』二〇〇二・一一、河出書房新社)

- (13) 注12に同じ。

- (14) 注12に同じ。

- (15) 竹村和子訳「女性・ネイティブ・他者—ポストコロニアリズムとフェミニズム」二〇一一・一一、岩波書店

- (16) 金富子『継続する植民地主義とジェンダー』(二〇一一・九、世織書房)参照。

- (17) 三本松政之・関井友子「ポリティカル・コレクトネス論争に関する研究ノート」『人間科学研究』(第一六号、一九九四、文科大学人間科学部)

- (18) 注12に同じ。

- (19) 注15に同じ。

- (20) 注12に同じ。

- (21) 「ケナリも花、サクラも花」では、日本語と朝鮮語が入り混じった典型的な例として「チャバる」「取る」という意味の朝鮮語が日本語の動詞化されたもの」という語が紹介されている

ものの、そういった語を用いた語りがテキストにおいて行われているわけではない。

(22) 注12に同じ。

(23) 注10に同じ。

(24) 注12に同じ。

(25) 注12に同じ。

(26) 『ケナリも花、サクラも花』(前掲)。

(かん・ゆに／早稲田大学大学院)